

9月29日 日 公演 @ たましんRISURUホール

音楽舞踊劇

新選組・土方歳三

初演を前に「土方歳三資料館」を訪問

音楽舞踊劇「新選組・土方歳三」の公演を前にした2019年9月17日、脚本・演出を担当した白鳥祐司さんと、新世代津軽三味線の第一人者、上妻宏光さんのお二人が、日野市にある「土方歳三資料館」を訪れました。

案内役は館長の土方 愛(めぐみ)さんで、土方さんは歳三の実兄から数えて6代目の子孫にあたり、歳三の生家で生まれ育ちました。土方さんの案内で、歳三の子ども時代の話や遺品の数々を見学し、その後、土方家の仏壇にてご焼香させていただいた二人は、これまで以上に歳三の人となりを肌で感じ、舞台への思いを強くしました。

白鳥「脚本の構想を練っていた2年前、実は一人でこの資料館を訪れていました。今日再訪し、土方館長のお話とともに遺品を拝見する機会を得られたことに感謝します。今回の訪問で、改めて土方歳三の持つ人としての魅力を感じました。激動の時代を生きた彼の軌跡を、舞台を通して皆さんに伝えられたらと思います。脚本・演出ともに終え、今は演者の皆さんにその思いを託しています。上妻さんのスーパープレイはもちろん、シンガーソングライター宮沢和史さんの語り、ダンスカンパニーDAZZLEが創り出す世界観を楽しんでいただけたらと思います。」

上妻「初めて資料館を訪れ、土方歳三の「力」だけではない人となりを感じることができました。その考え方や才能、「入室但清風*」という言葉に評されたその魅力など、さまざまな要素があったゆえに多くの人を惹きつけたのだと思います。今日の訪問で得たこの高揚を、僕なりに音楽として表現できたらと思っています。僕自身も伝統の中に身を置きながらも、新しいことに挑み続けてきました。革新的であることは、時として守ろうとしている者たちと相容れないこともある。そんな中でぶれずに貫く思いを持ち続けることが、いかに困難なことであるか…。共鳴にも似た気持ちの昂りを感じます。そんな彼だからこそ、時を超えて多くの人を惹かれるのでしょう。古きもの、新しきもの、変わりゆく時代のうねりの中で葛藤するその思いも超え、時代を駆け抜けた歳三の生き様を、三味線で表現したいと思います。」

没後

150



歳三×日野

Toshizo Hijikata

©2019 Hino City



土方歳三手植えの矢竹前にて京都へ向かう前の歳三が毎日の稽古に使用していた木刀のレプリカ(左)と、近藤周助先生の木刀レプリカ(右)。その重さに驚く2人。

*入室但清風とは、榎本武揚が箱館時代の土方歳三の人となりを評したもので、「歳三という男。部屋に入ると清らかな風が吹くような、そんなさわやかな人物であった。」と評していることをあらわしています。

「誠」という漢字が表すとおり、「言つを成す」ために時代を駆け抜けた歳三の生きた軌跡を、ぜひ音楽舞踊劇「新選組・土方歳三」で感じて欲しい。